

マッセ・市民セミナー

『当事者』と『もうひとりの当事者(家族・介護者)』の新たなコミュニティづくりに向けて

8月13日、府社協と大阪府市町村振興協会は、マッセ・市民セミナー『さまざま当事者・介護者(家族)の会の取組から学ぶ』を開催し、約110人が参加しました。



津止教授

立命館大学の津止正敏教授による基調提案では、「本人支援の積極的側面を大切にすると同時に、家族介護の抱える課題にも無関心では

いけない」との話に続き、「支援者や支援機関が多様化する中で、ネットワークやSNS、ワークショップやカフェといった、これまでの組織や支援のあり方ではない、柔らかな『繋がり』が生まれる場や機会が必要。立場や主張の違いを認めつつ、みんながつながって声をひとつにし、ひとくくりにはできない課題を共感しあえるような、新たなコミュニティづくりを」との提起がありました。

続くリレートークでは、はじめに、日本認知症ワーキンググループの水谷佳子さんが報告。認知症当事者の人たちの意見発信までの葛藤の道のりを紹介しながら、「認知症の本人も周囲の人たちも希望を持って暮らせるように、たくさんのお会いやともに歩む時間を大切にしたい。同じ疾患や障がいだけでなく、さまざまな当事者グループや家族の会がつながり、話し合うことで可能性が広がるのでは」と想いを述べられました。

続いて、①介護者(家族)の会として地域での場づくりを進めていること(田中まさ子氏)、②男性介護者特有の課題(珠玖潤一氏)、③若い世代が介護を

連載 Vol.3 つながりで拓く地域福祉実践 ~地域と施設の連携：高槻市~

今、地域貢献委員会やオール大阪の社会福祉法人による社会貢献事業の取り組みが進んでおり、一層の活性化や具体的な取り組みの広がりに期待が寄せられています。今回は寿栄川添地区福祉委員会と福祉施設「サニースポット」の取り組みに焦点を当て、地域に根差した連携の重要性を紹介します。

「いらっしやいませ」と元気の良い声が響くのは寿栄コミュニティセンターです。ここでは、寿栄川添地区福祉委員会が6年前から毎週木曜日の10時~15時に、ふれあい喫茶を実施しています。開設当時の委員長の川辺さんは「喫茶では飲み物やお菓子を提供しています。コーヒーを飲み、お話をしながらゆっくり過ごすなど、今では1日に80~100人が来られていますよ」と笑顔で話します。



参加者同士の会話にボランティアも入るなど、楽しい時間を過ごしています。

そんな中、約3年前、社協の地域福祉活動計画策定委員会の場で、社会福祉法人つながり「サニースポット」の施設長である今井さんから「施設外就労の環境に合わない利用者がいるが、地域活動に参加できないか」と相談がありました。川辺さんは快諾し、当事者も喫茶と一緒に活動することになりました。

現委員長の河村さんは「障がい者ということで、少し構えていましたが、実際に会ってみると私たちと何ら変わりはありません」と振り返ります。苦手な部分を周囲がそっと手助けすることで、喫茶の参加者との会話も楽しむことができました。

「本人は言葉には出さないけれど、とてもイキイキと活動をしていました。きっと、この活動を通して自分に自信がつけられたはずですよ」と今井さん。

高槻市民間社会福祉施設連絡会で事務局を担当している社協の山田さんはこう語ります。「施設連絡会では、ここ数年、地域貢献のあり方を模索してきました。日ごろから福祉課題に積極的に取り組んできた地域だからこそ、地域と施設が連携して、一人の障がい者の社会参加を実現できたのだと思います」

地域福祉の実現を願うさまざまな福祉関係者の思いを、暮らしに身近な地域でしっかりとつないでいくこと。社協には、こうしたプラットフォームの役割を發揮することがますます期待されています。